

「目から鱗が落ちる」 読書の愉しみ

麻井 宇介

この浩瀚な学術書は、ワインを語ろうとする人はもちろん、深く識りたい人たちにとって、避けて通れない書物である。そしてまた、歴史地理学者の論文が、読んでこれほど面白いものであることに、ワインに興味のない人たちでさえ、思わず引きこまれていくであろう。

ロジェ・ディオンは、彼自身が、フランスのワインについて当然のこととされていた事実や解釈を、あやしいと気づいたところから、この主題に取り組み、意外な事実を歴史の中に明らかにしていく。その具体的で人間に即した視点からの記述は、自然と人々の関係を説きつつ、時に「目から鱗が落ちる」読書の愉しみを与えてくれる。

たとえば、ブルゴーニュのぶどう畑は石灰質土壌の傾斜地を選んで比類なきワインの産地となったが、そこにぶどうを植えたのは、ただ単に、その地方で主力の麦作農耕に適さない土地であったという指摘。コート・ドールの成功は、ぶどうを根づかせるための深耕や客土による土地の改良が主因であるという。彼は歴史資料を精緻に検証して、銘醸地の成立はわれわれが期待するような恵まれた自然条件によるのではなく、純粋に人的な「土の輸入、品種の選択、我慢強い労働」にあったという。コート・ドール製酒局が一八二九年に提出した報告書を肯定し、「このことはフランスの偉大なワイン産地のすべてに当てはまること」と述べている。

「フランスは、ぶどう畑とワインの歴史が、そこに暮らす人びと全体の歴史を照らす国である」と喝破したロジェ・ディオンは読み解くワイン像は、フランスにとどまらず、グローバル化した今日のワインを理解する上で、多くの示唆を与えてくれる。

(ワイン研究家)

浩瀚な資料と歴史への明察から導きだされる
フランスのそしてワインの来歴。
ぶどう畑に刻まれた人間の営みを読む。



B5変型・上製函入・650頁
予価：本体12000円＋税
ISBN4-336-04257-8

お取扱い書店

*ご注文は最寄りの書店へお願いいたします。
*小社へ直接お申し込みの場合は送料無料・代金引換でお送りいたします。

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL.03(5970)7421 FAX.03(5970)7427
http://www.kokusho.co.jp

Histoire de la vigne et du vin en France des origines au XIX^e siècle

Roger DION

フランスワイン 文化史全書

—ぶどう畑とワインの歴史—

ロジェ・ディオ

福田真弘・三宅京子・小倉博行 訳



国書刊行会

ポルドー、ブルゴーニュ、シャンパーニュ……フランスの銘醸ワイン産地はどのように成立したのか。ぶどう栽培に適した地中海沿岸ではなく、より寒冷な北の地域に銘醸ワイン産地が、集中しているのはなぜか。

フランス歴史地理学の泰斗として再評価著しい著者が、古代から近代にかけて、現代のワイン地図の来歴と、それによつて人間の営みとを、精緻に分析する大著。



【目次】

序 論 フランスにおけるワイン用ぶどう栽培の地理学上の特性 (地中海式ぶどう栽培・商業用ぶどう栽培の北限)

第1部 起源

- 第1章 ワイン用のぶどうの木は、フランス土着の植物なのか、それとも外来の適応植物なのか
- 第2章 ぶどう栽培を伝えたギリシア人『オデュッセイア』・聖書の起源・蛮族におけるディオニュソス
- 第3章 ガリアにおけるぶどう畑 アウグストゥスの時代まで (ローマによる植民化・キケロ・コート・ロティとエルミタージュ)
- 第4章 ローマ帝政期におけるガリアのぶどう畑 (ストラボン・アプロロギカ・ドミティアヌス帝の勅令・ブルゴーニュの起源)
- 第5章 輝かしいぶどう栽培が古代世界の滅亡を生き残る (古代ローマ人のぶどう畑への敬意・教会・修道院・王侯のぶどう栽培)

第2部 中世における商業用の偉大なぶどう畑

- 序 論 ロワール川からライン川にかけての地域 (アルザス・セヌ川流域・「フランスのワイン」・パリのぶどう畑)
- 第6章 イヨヌ川、ロワール川、アリエ川の地方 (シャブリ・オルレアン・サンセール・アンジュ・サン・ブルサン)
- 第7章 オート・ブルゴーニュ地方とフランシュ・コンテ地方 (ボヌのぶどう畑の復興・アヴィニョンの教皇とブルゴーニュ公)
- 第8章 地中海沿岸とローヌ川沿いのぶどう畑 (フランス国王の奨励・首年利入りワイン・甘口ワイン・パリとの連絡)
- 第9章 中世におけるラ・ロシュのぶどう畑 (海洋交易の発展・オレロン島の新設目録・ラ・ロシュルがボルドーに先行する)
- 第10章 ボルドーの中世のぶどう畑 (市の自治権とイギリス市場の獲得・ボルドー特権・ベルジュラックの特例)
- 第11章 ワインたちの闘い (強いワインへの攻撃・中世の宣伝方法・国王の介入)
- 第12章

第3部 近代社会の需要に対するワイン生産の適応

- 序 論 最北のぶどう畑の放棄 (大いなる創始者たちの時代は中世に終わる)
- 第13章 十七、八世紀におけるフランスのワイン生産の性格に与えたオランダ貿易の影響 (オランダの商法・オ・ド・ヴィの生産)
- 第14章 十四世紀から十八世紀まで、大都市周辺における庶民的ぶどう栽培の誕生と発展 (ワイン採取の習慣・平凡なワイン)
- 第15章 十四世紀からアンシャン・レジーム末期までにおける近在のぶどう畑によるパリの庶民への供給 (労働者の増大・パリ市税)
- 第16章 十七、八世紀における、パリへの供給域におけるぶどう畑の衰退 (良きぶどう農夫の独り言・ボージョレ)
- 第17章 高級ワイン用ぶどう栽培の近代的形態 シャンパーニュの登場『シャンパーニュ』の発明者・ドン・ペリニオン・莫忘性)

参考図版/日本誌版地図/地名・人名・品種名索引

ぶどうと
ワインの歴史に
ささげられた、
最大の贈物

樺山 紘一

フランスは、いうまでもなく、ぶどうとワインの栽培・生産において、世界最高の国である。けれども、ぶどう栽培はるか東方で始まったし、ワインの創始者もフランス人ではない。古代のギリシアやローマの文明が、それを手がけて完成の域にたどり、やがてフランスの土地にも定着していった。その間には、想像をこえる努力と工夫とが必要だった。ぶどうにとっての気候上北限をこえ、最適な地形と土壌をもとめ、優秀な品種をえらび

とる。しかも、ワインという製品の輸送・流通を考慮しつつ。王侯も、修道士も、むろん無数の農民も、全フランス人がこの事業に参加した。ときには消費者・批評家としても、「はつきりと人間の意志が刻印された歴史」の産物と、著者はワインを定義する。じつさい、本書の任意のページをひもとくと、どこにもフランス人が各地において投入した莫大なエネルギーの根柢が、ありありと見えてくる。著名な産地であるボルドーやブルゴーニュ、シャンパーニュやコニャックは、みなその結晶として登場したものだ。銘酒としていま評判の、あのシャブリやボージョレも、「人間の意志の刻印」である。本書はそれ以上に論じて、ぶどうとワインの歴史にささげられた、もておられる最大の贈物となつた。一九五九年刊行という、かなり古い書物だというのに、年代もののコクがくわわって、味わいは格別である。この銘酒を開栓のちは、早めにお読みいただきたい。(東京大学教員)

【関連書籍】

- 中世の図像学 エミール・マール/田中仁彦・池田健二ほか訳
- 1 2 ロマネスクの図像学 上下 各4,680円
- 3 4 ゴシックの図像学 上下 各5,000円
- 5 6 中世末期の図像学 上下 各5,000円
- カセット/田中仁彦訳
- ブルゴーニュ公国の大公たち 6,500円
- ワインと書物でフランスめぐり 1,000円
- 十八世紀のフランス・ムン、ジャンディ・ペルナール/戸部幸次訳
- 幸福の味わい 7,000円